心が出会ったのは・・・・三話

（一話）

Ａさんに授かった赤ちゃんの頬に青いアザがあった。
医師達は誰も皆、一生治らないと言った。それでもどこかに治してくれる医者がいるはずだと、どれだけ探しまわったことか。しかし無残にも一人もいなかった。

Ａさんはある日、自分の頬に青いアイシャドウーを塗って町を歩いてみた。
　　ジロジロ、ヒソヒソ‥注がれる視線を痛いほどあびた。
ああ、あの子はこれから先、この視線を一生あびてゆくのだ。
どんなにか辛いだろう、苦しいだろう、悲しいだろう。かわってあげたい。
Ｕ子ちゃん、辛いときは私にぶつけるんだよ。苦しいときはお母さんも一緒に苦しむからね。悲しい時は一緒に泣こう。そう思いながら夕暮れまで歩き続けた。

アザは無情にも、成長と共に大きくなっていった。
「お顔の青いのが消える石けんがほしい」・・と言っている我が子にアザは一生消えないことを伝えなければならない時がきた。
小学校の一年生の時だった。その現実を伝えて
「Ｕちゃんのお顔に青い色があるのがなんでなのか？ママにもわからない。けれどきっと大事なわけがあるのだと思う。いつかそのわけがわかる日が必ずくる」と言った。

娘は黙って聞いていたが、話し終えたとたん、娘の目から涙がポロポロポロとこぼれた。・・・・泣くがいい。おもいっきり泣くがいい。
こんな幼い子に人生の深さなどわかるはずがない。これからも何度でも泣くがいい。
私の胸に顔をうずめて泣くがいい。心の中でそう叫びながら娘を抱きしめた。

その晩、私はＵ子が笑ってくれる面白い話をした。娘は声を上げて笑った。
その時思った・・「そうだ。私はこれからこの子が声を上げて笑う話をしよう。楽しい気持ちになる話をしよう。心が美しくなる話をしよう」・・と・・

そしてある、晩娘が言った。
「ママ私ね。時々、悲しい気持ちになることがあるんだけどいつも、ママのお話を聞いていると、悲しい気持ちがず～～と遠くへいっちゃうんだよ」・・
私は思わず娘を抱きしめた。涙がとどめなく溢れてきた。喜びの涙だった！

それから何年もの年月が経ち、今では娘は一児の母となり良き伴侶に恵まれ幸せに暮らしいる。
振り返って見ると、娘の笑い顔が見たくて、必死に話したその話から自分がどれだけの楽しさと、喜びをもらえたことか‥
「心が喜ぶ話」は悲しみも、苦しみも、寂しさも何もかもを生きる力にしてくれることをはっきりと知った。

話をさせてもらえたこと！それがどれほど大きな幸せであったか！

娘が高校生の時スーパーでアルバイトをしていたことがある。
ある日、アザのある少年がきたそうだ。その晩娘がポツリと言った。
「あの子も毎晩楽しい話が聞けてるといいな」・・・・

（二話）
村に文治郎さんという、物静かなじい様がいた。
ある年、連れ合いが肺結核で亡くなった。そして相次いで息子も嫁も亡くなった。
その頃は肺結核はまだ不治の病だっだ。文治郎さんの手に幼い３人の孫が残された。
連れ合いに先立たれるだけでも辛いことだが、それでも、もしも連れ合いだけだったなら文治郎さんは「かわいそうだ」と皆にいたわられ悲しみの中にいることもできたのだが・・悲しむどころではない現実が待っていた。
乳飲み子を抱えて村の嫁さんの家を回り乳飲ましてもらい、帰ってくると
腹すかして泣いている幼子の世話をして、しかもそれだけではなく畑の仕事もしなければならなかった。我(われ)の飯など食う暇などなく気がつくと何日も飯も食わずに寝たか起きたかもわからない毎日だったが、子等はどんなに世話しても
「かぁちゃん。かぁちゃん」と言って泣き止まんかった。
物静かな文治郎さんでもさすが己が泣きたい思いだっただろうに、それでも
子らが不憫でならなかったのだろう。ただの一度も子らを叱ったことも声荒げたこともなかった。そして日が経つうちに「かぁちゃん。かぁちゃん」言っていた子等がいつのまにか「じっちゃん　じっちゃん」と言うようになり、笑い声も聞こえるようになった。村のもんもほっと胸なでおろしたその頃・・
　奇妙なことが起こりはじめた。
時々真夜中、村の火の見櫓(やぐら)のあたりから、凄い声がに聞こえてくるようになった。
みんな恐ろしくて、確かめにゆくもんは誰もおらんかった。

それが文治郎さんの声だったとわかったのは、ずいぶんと後になってのことだった。
子供らが村の学校に通うようになった頃、ある晩、寄り合いの酒の席で皆が
「文さんようがんばったな。まぁ飲めや」と酒つごうとした時、文さんがぽつりと言った。
「あん時は、ほんに苦しくて、何度も何度もどうしてよいかわからなくなり、体の力がへなへなとぬけちまうようだった。おらがふぬけになっちまったら、この子等は一体どうなっちまうんだろう。そう思うと体が凍るようだった。このままだったらおら、だめになっちまう。そう思って子供らが寝ついてから、そーと家出て、火の見櫓(やぐら)んとこ行って一番上までに登って、大声で言った。
・・文治郎、しっかりしろ～おめえの仕事はまんだ終わってねえぞ～しっかりしろ～って・・って　自分に必死に号令をかけてたんさ」
あの真夜中のもの凄い声が、物静かな文治郎さんの声だとわかった時みんな驚いた。文さんは自分に号令をかけながらその道しかない道を必死に走ったのだ。
自分にかけた号令が、文さんの心の奥底から力を立ち上がらせたのだ。

（三話）
僕は中学生の頃、ひどく荒れていた。家にいろいろなことがあり、その上担任に嫌われ受験を目の前に、ただただ荒れてゆく自分をどうすることもできなかった。
そんなある日担任から「お前なんか存在する価値はない」と言われた。
気がつくと僕は「ウオ～」と叫び声を上げ教室の窓ガラスを拳(こぶし)で何枚も割っていた。
担任は校長を呼んでくると言って教室を出て行き、校長を連れてきた。
校長は「この子と二人にしてくれ」と言い担任を職員室に帰した。
二人になると校長はポケットからハンカチを出して血の出ている僕の手をふいてくれて、もう一枚のハンカチを包帯のように手にまいてくれた。
それから何も言わずに床に散らばっているガラスの破片を拾いはじめた。

いつのまにか僕も一緒に拾っていた・・・・・
すべて拾い終わると、校長は僕の前に立ち、深々と頭を下げた。
そして頭を下げたまま言った校長のその言葉に、僕は耳を疑った。
校長は僕に「すまない」と言ったのだ。「君をこんな気持ちに追い込んでしまいすまない」と言ったのだ。・・・・・気がつくと僕の目からも校長の目からも涙がこぼれていた。

どのくらいそうしていたか・・ふと気がつくと窓の外に夕焼けが見えた。
とてもきれいだった。僕は、はっとした。今まで夕焼けなど見る気もなかったし見てもなんとも思わなかった。・・・それが今なんと美しく思えたことか。
校長の涙が僕の心の中の汚れも荒(すさ)みもねじれも渦巻いていた汚いものすべてを洗い流してくれたのだ。自分が大嫌いで自分を責めていた気持ちが嘘のように消えていた。そして体の奥から信じられない力が湧いてくるのをはっきりと感じた。
・・・・・・この日のことは、校長も僕も誰にも言わなかった。

卒業してからもいろいろなことがあったが辛く苦しい時には必ずあの日の校長の「人としての最高の仕事」を思い出させてくれた。

僕は今、罪を犯してしまった少年たちの施設で仕事をしている。彼らのひとりひとりに「すまない」と詫びながら精一杯の「人としての最高の仕事」をさせてもらっている。

どの話も実話だ。

どの話も何度、大声で「痛いの痛いの飛んでゆけ～」と叫んでも
飛んでいってはくれなかった痛さ（現実）と生きてゆかねばならなかった。
運命(さだめ)という人生の土俵で飛んでいかなかった痛さと四つに組まねばならなかった
彼らがその土俵で出会ったのは・・・・

アザともに生きてゆかねばならなかったＵ子さんが出会ったのは、母親の思いだった。ただただ泣きうろたえる母ではなく、その現実に凛と立ち向かった強い母親だった。だがその母親も思いもしなかった現実を前にして、きっとガタガタと体震わせていただことだろう。けれども、なにか大事なわけがあるのだ。と信じ、立ち向かう思いを外に向けるのではなく、自らの心に向かったのだ。自分の声で、娘の心に懸命に心が喜ぶ話をしたのだ。
かつて、第二次世界大戦の最中のオランダの母親達の言葉がある。

私達は戦火の中でも、毎晩必ず子供達に心楽しい話を届け続ける
それが私達の大声での戦争反対の行為なのだ。

本気で我が子の幸せを願う時、母親ができる実に確かな実に大きな行為だ。

文治郎さんも体から力がぬけていってしまう崖っぷちに立たされた時、誰かの助けを呼ぶのではなく、自分の心に向かって号令をかけたのだ。
号令とは
「大勢の人に同時に動けと大声で指図すること。上の者が下の者に命令すること」だが。
文さんは自分の心に「我(われ)の力よ。出てこい」と必死に叫んだのだ。
文次郎さんが出会ったのは心の奥底に眠っていた生きぬく強さだったのだ。

自分で自分をどうすることもできなかった少年が出会ったのは本物の教師だった。
生徒の苦しさの前で規則ではなく「すまない」と頭を下げた教師がいたのだ。
教師とは人を教え導く人である。本物の教師に出会い少年は自分を嫌っていた思いが消え・・自らの心に身をひそめていた・生きる力・に出会ったのだ。

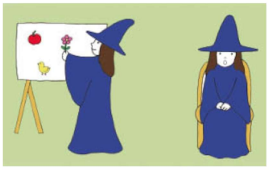
心が「大きさ・強さ・ 優しさ・美しさ」と出会ったとき
すべてがうまくゆく！

知性とは教養とは目の前の苦しい現実を良き方向へと向かわせてゆける力である。
政治家が、教師が、医師が、弁護士が、子供のすぐそばにいる大人達が本物の知性を持っていてくれることを心より願い、文さんが自分にかけた号令のように
「おめえの仕事はまんだ終わってねえぞ～」と自分に向かって叫びながら、「お話の魔法使い」が沢山飛んでくれることを願い今年も、悲しみも苦しさも遠くへ飛ばしてくれる「心が喜ぶ話」を一生懸命に届けよう！

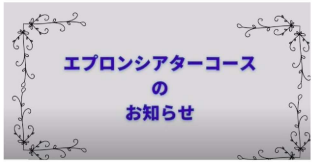
★長い間お届けしてきた「新年のいい話」は今回で最後とさせていただきます。
けれどもまだまだ走ります～！お届けするのは下記です！

★「聞いて良かったいい話」ラジオ放送
・言葉の喫茶ルーム・ポットキャスト

★「楽しいお話オンライン６講座」
（レッスンなしコース・好きな時に自由に！）



↑
（ レッスン有・ソリストコース）



指先人形コース　　かぼちゃコース

小さな劇場をお届けします！
お問い合わせは・おはなしかご　→
手遊び・人形・お話・パネルシァター・言葉遊び

★保育園幼稚園に・支援センターに・学校にお届けします！
★年齢別に・学年別に・クラス別に届けます。

★保育士研修・先生方の研修会・大人気です！
★短大・専門学校にて児童文化の授業を担当します。
就職に向けて確かな文化力を育てます！

おはなしかご・〒 135 － 0001　江東区毛利 1 － 17 － 5・電話 090 － 5333 － 3002
メール　　kotoba@ohanashikago.com